

小泉八雲（こいずみやくも）旧居跡の碑 下山路通6丁目



県中央労働センター玄関にある「小泉八雲旧居跡」の碑は、このセンター敷地内にあった明治の作家・小泉八雲（ラフカディオ・ハーン、1850-1904）の旧居にちなんで、1994（平成6）年3月29日に除幕された。1994年は八雲が神戸に移り住んでちょうど百年という年で、それを記念してこの碑は建てられたのである。碑は高さ170㌢、幅150㌢の御影石製で、正面に貝原俊民兵庫県知事（当時）の題字による「小泉八雲旧居跡」の文字と八雲が神戸に住んでいた45歳頃の横顔のレリーフがついている。

ところで、ギリシャでイギリス人の軍医を父として生まれ小泉八雲は、のちイギリスとフランスで教育を受け、その後、渡米して新聞記者などをする傍ら、翻訳や文筆活動を続け、名を上げていった。そして、1890（明治23）年4月、後に兵庫県知事となる服部一三（当時文部省普通学務局長）のついで来日し、松江中学校や熊本の五高で英語を教えた。はじめ、彼は日本には一時滞在のつもりでいたが、日本のよさにほれ込み、日本研究をすべく、長期滞在を決心した。島根時代に小泉節子と結婚し、1894（明治27）年11月には神戸に居を移し、英字新聞「神戸クロニクル」の記者となったのである。この時住んだ場所がこの碑のある敷地であった。記者の傍ら、作家活動も続け、ここ神戸で「心」「佛の畑の落穂」などを執筆し、また、長男の誕生を機に帰化して小泉八雲と改名したのも神戸であった。八雲は1896（明治29）年8月に東京に移るまで、約1年9ヵ月、神戸に在住したことになる。

場所：神戸市中央区下山路通6-3-30